

『まだ兵が多すぎる』

士師記 7 : 1～25

序. 「高慢」という恐ろしい性質

聖書のなかで、はっきりと警戒するように教えられている心の状態が一つあります。それは「高慢」です。高慢というと、偉そうとか、自慢ばかりするとかそんなイメージでしょう。しかし、聖書が言う高慢は、人間のもっと根深い心の性質を表現した言葉です。高慢とは罪の本質そのものだからです。神様の愛と憐みによって生かされていながら、神様を抜きにして生きていると考える思い上がり。自分の力でやって来たんだという思い込み。他人を押しつけて、自分を中心にしてしか考えられない自己中心性。それは罪の性質そのものです。

罪の問題を自分で解決できないのと同様に、高慢の問題も自分では解決できるものではありません。私たちにできるのは、ただ神様の恵みによって「ああ、私は高慢だなあ」と気が付かせていただくことだけです。それは「私は罪人なんだなあ」と気が付かせてもらえることと同じです。高慢の反対は謙遜ですが、謙遜になろうとして努力してなれるものではありません。日本の文化の中には謙遜にふるまう者がたくさんありますが、そういうことが謙遜になるわけではありません。完全に謙遜な礼儀を守りながら、心の中ではまったく高慢な人は沢山います。敬語を使いこなし、下座に座り、自分の名前を最後に書いていながら、高慢であるということは当然あります。神様を中心に置くことのできない心。自分のことで頭と心がいっぱい生き方。それが高慢です。「謙遜になろう！謙遜にふるまおう！」と心掛けている人が、果たして本当に謙遜でしょうか。謙遜になれるでしょうか。なれません。繰り返しますが、私たちにできるのは、ただ神様の恵みによって「私は高慢だなあ」と気が付かせていただくだけです。

そういう意味では、神様の教育は、本当に実践的です。神様の恵みが無ければ、人は自分が高慢だという事にすら気が付くことが出来ません。私たちは生まれつき自己中心なので、その高慢さに気が付くこと自体が出来ないのです。神様は、相応しい時に私たちの高慢さを暴き、その問題を取り扱い、打ち砕き、その後で謙遜で素直な心を造り上げてくれるのです。折に触れて高慢さを打ち砕いてくださるのは神様の憐れみと恵み。そのまま突き進んで、大きな苦しみを味わわないようにという神さまのストップなのです。

1. 兵が多すぎる

今日の箇所は、まさにそのような神様の取り扱いが描かれるところ。ひとの高慢を防ぎ、謙遜に神様とともに生きるよう導いてくださるお姿です。それが「兵が多すぎる」という神様の言葉に込められています。

今、イスラエル人は七年間の間ミディアン人たちの謀略に苦しめられ、疲弊しきっていました。民の生活は不安に包まれ、いつ敵がやって来るかと怯えながら暮らしていました。そんな彼らを救い出すために建てられたさばきつかさがギデオンでした。最初臆病だったギデオンでしたが、神様の励ましによって強められ、いよいよミディアン人を中心とする東方連合軍と戦いを交えようとしていました。

戦いのために集まった兵士たちは、イスラエルが三万二千人。対するミディアン・東方連合軍はというと、8:10によれば十三万五千人でした。3万2000人と13万5000人。圧倒的な数の差でした。四倍以上も敵軍が多いのです。聖書の表現を使えば「ミディアン人やアマレク人、またすべての東方の民がいながらのように大勢、平地に伏していた。彼らのらくだは、海辺の砂のように多くて数えきれなかった。」視界いっぱいに広がる敵陣の兵士とラクダ。それに比べてイスラエル軍の頼りなさ。ギデオンは心配のあまり二回も神様に祈り、本当に勝たせてくれるんですねと確認するほどでした。そんなギデオンに神様は

とんでもない指示を出します。「あなたと一緒にいる兵は多すぎるので、わたしはミディアン人を彼らの手に渡さない。イスラエルが『自分の手で自分を救った』と言って、私に向かって誇るといけないからだ。」神様は、いったい何を基準に「多すぎる」と言ったのでしょうか。四倍以上の敵を前にして、少なすぎるのではないのでしょうか。「恐れおののく者は帰れ」と呼び掛けると、なんと二万二千人が帰って行ったと言います。私がギデオンだったら、本当におろおろしてしまうだろうと思います。神様、なんて指示を出すんですか。そして、三分の二も帰っちゃうってどういうこと！？何考えているの！！と怒りすら湧いてきます。

残った一万人を前にして、神様はさらに畳みかけます。「兵はまだ多すぎる。」ここまで来ると、神様の考えを疑いたくなります。すでに1万対13万5000なのです。何が多すぎるのか。もし、これが神様からの指示でなかったならば、そうそうに戦いを取りやめにしたいところ。こんなにやる気のない兵士たち、こんなに少ない兵士たち。準備不足の負け戦などしないほうがいいと考えるのが賢いと思われるのです。でもこれが神様の導きであるというのが恐ろしいところです。ギデオンは神さまから多くを求められています。「私があなたとともにいる」というその約束だけを握りしめて進んで行くように求められているのです。

兵士を減らす基準は水を飲む際に、ひざをつけて直接口で飲むか、それともひざをつけずに手ですくって飲むかということでした。この基準の意味についてはいろいろと解釈が分かれるところですが、聖書自身はその理由を詳しく語りません。結果だけを見ると、手ですくったものたちが選ばれて、その数は300人。これで戦うようにという主の命令でした。300人…。ずいぶん悲しい数字になりました。3000人ではありません。300人です。一万人が300人。この会堂にはだいたい30人ほどが集まっていますが、これが3人の礼拝になったら、どんなにさみしい気持ちになるのでしょうか。イスラエルの場合は、3万人が300人に、百分の一にまで減らされて、これで戦えと言われたのでした。普通に考えれば、神様は何を考えているのだろうかと思ってしまうような指示です。常識では考えられない作戦です。しかし、目的ははっきりしています。イスラエルが「自分の手で自分を救った」といって、神様に対して誇らないようにするためなのです。

・自分の力を誇り頼ることがないようにするため

この点を、私たちはよくよく考えてみる必要があります。神様はこれほどに、人間の傲慢さというものを警戒しておられました。成功する。勝利する。一番になる。お金がある。知恵がある。知識がある。地位がある。能力がある。そういう思いが、どれほど簡単に人を高ぶらせ、神様を忘れさせ、感謝をしない人にさせてしまうか。神様の恵みを忘れるという事にかけて、人間はずばぬけて得意なのです。

四対一ではまだ多すぎる。13対1でもまだまだ。40対1になって、ようやく神様は納得されました。何に納得されたのでしょうか。それは、これだけの少ない数で勝利したなら、彼らは決して「自分の力で勝利した」とは言わないだろうということにです。神様は、こんなに少ない人数の私たちを用いて、神様の力で勝利を与えてくださったと、謙遜になるだろうということにです。三万人や一万人いるうちは、彼らの兵力にまだ頼る気持ちが残っていたかもしれない。しかし300人となると、もはや神様に頼らないではいられない。これで勝利したなら、神様に感謝しないではいられない。そういうところへと導かれたのでした。

これは人間の実に頑なな傲慢さを、神様がよくご存じであることを教えてくれます。私たちは死ぬまで頑なですが、本当に死に際してまで頑ななのです。家族がいる時には、家族の恵みに気が付きません。お金があるときにはお金の恵みに気が付きません。健康があるときにはそれに感謝できません。命を失う時になってもまだ、いのちを与えてくださったお方に心に向けることも出来ないのです。しかし、神様の不

思議な導きの中で、苦しみや悲しみを通して本当に頼るべきお方を見出させてもらうことがあります。これは神様の恵みと憐みに他なりません。神様にたどり着くまでに、あれに頼りこれに頼り、それでも何のかいもなかったひと。その人が、神様にしか頼れなくなった時に、確かに神様に救い出される。そういう経験を通して、主は本当にご自身が神であられることをお示しになられるのです。この教会の中にも、そういう個人的な証し、体験を持っておられる方が何人もおられるのではないのでしょうか。詩篇もこう歌っています。「苦しみにあったことは、私にとって幸せでした。それにより、私はあなたのおきてを学びました。」苦しみの中であらゆる高慢の種を取り除かれ、すべての頼りの綱を失って、そこでこそ本当に神様に頼ることを教えてもらうのではないのでしょうか。そうでもしなければ、私たちの頑なな高慢さは取り除かれないというのを思う時、本当に神様の知恵深いお取り扱いは私たちへの愛情だと感じるのです。多くの良いものに取り囲まれながら空しい高慢さを積み上げるよりも、神様とともに謙遜な平安を頂くことを。その価値を、私たちは知ったからこそクリスチャンの道へと進んだことを思い起こさせられます。

2. 不思議な勝利：夢による不安、「主のため、ギデオンのため」、同士討ち

かくして、わずか 300 人の兵士とともに戦おうというギデオン。神様は彼にもう一度憐れみの声をかけてくれます。もしあまりに恐ろしいのなら、敵の陣営に偵察に行き、彼らの様子を見てきなさい、と。さっそく、群れを成すミディアン人の近くに行き、こっそり聞き耳を立てていると話が聞こえてきました。一人が、夢を見た。「大麦のパンの塊が転げ落ちて来て、ミディアン人の天幕を倒してしまった。」という夢。するともう一人が、「それはギデオンの剣に違いない。神がギデオンの手にミディアン人を渡されたのだ」というのでした。大麦パンのような貧しい食事が、ミディアンの大群を打ち倒すという意味。神様が、すでに彼らの心に恐れと不安を注ぎ始めてくださっていることを確信したギデオンはこのことに深く励まされます。主はともにいるということがどういうことかを思い起こして、一気に戦いへと進みました。

作戦は、三百人で陣営を取り囲み、合図とともに「主のため、ギデオンのため」と叫び、角笛を吹き鳴らすこと。この叫び声は、彼らの心を一気に恐怖に陥れる瞬間となりました。角笛が鳴り響く中、主は敵の陣営全体を混乱させ、仲間同士で戦うようにさせました。こうなるとは、数の差に意味はありません。乱れた陣営は同市打ちしながら逃げ去り、イスラエル人は彼らを追撃します。最後にはエフライム族の援軍によってミディアン人の二人の首長を打ち取って、戦いは終結しました。主がすべてを治めておられるとはどういうことかを目の当たりにさせられたのでした。

3. 神様の人間の取り扱い

(1) 高慢を打ち砕かれる

ただ士師記全体の流れを振り返ると、考えさせられます。二つのことを確認したいと思います。

第一に、主は不思議な方法で高慢を打ち砕かれるということです。形だけの礼拝は喜ばれません。偶像も愛しながら神様も愛するような生活を喜ばれません。自分の能力に頼りながらも、神さまにも頼るということでは満足されません。主に信頼し、主のみを愛し、心から主を礼拝して生きること。そのうえで、主が与えてくださる恵みを感謝して受け取る生活があるのです。これらの順序を間違える時、主はいつでもその恵みを取り除いて、私たちの高慢を打ち砕かれるお方なのです。七年間のミディアン人による苦しみ。三万人を三百人にまで削る作戦。主は不思議な方法で、私たちの愚かな地震や誇りを打ち砕き、本当に健やかな謙遜さと平安へと導いてくださるお方です。そのことをただ感謝して受け止めたいと思います。

(2) 弱さに寄り添ってくださる

第二に、主は人の弱さに寄り添ってくださるおかただということ。神様はギデオンの臆病な心に同情し、彼が必要としていた励ましを何度も差し出してくれました。私たちは簡単に神さまにつぶやきがちですが、しばしば私たちはこのような主の配慮がすでに用意されていることに気が付いていないだけかもしれま

せん。1 コリント 10:13「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」ギデオンの戦いは、まさにこのコリント書の約束の裏側を見せてくれるような記事でした。苦しみや試練を外側にして、そのなかに不思議な宝物を神様は差し出されるのです。一人一人の弱さに合わせて、配慮のある訓練と助けをそなえてくださる。

むすび. 経験を通して謙遜にされ、主に栄光を帰す者に

今日のような戦いを経験したイスラエルもギデオンも、深く神様への信頼を心に刻んだことでしょう。臆病な心に勇気を与え、不安な時に大いなる勝利を与えてくださった神様の助け。その思い出を子どもにも語り継いだことでしょう。そのような真実な信仰が与えられたのです。

私たちは、このような神様の配慮ある教育によって、少しずつ整えられ強められ変えられていくのです。自分の高慢さをどうすることも出来ない私たちを、そのようにして主は取り扱ってくださる。今私たちが置かれている様々な困難も、そのような良い目的があることに後から気が付くのではないのでしょうか。試練の中にあっても、めぐみのなかにあっても、主に栄光をお返しする生き方を。今日のギデオンの姿からそのような信仰の眼差しを学び取りたいと思います。

『まだ兵が多すぎる』

士師記 7 : 1~25

序. 「高慢」という恐ろしい性質

1. 兵が多すぎる

- ・自分の力を誇り頼ることがないようにするため
- 2. 不思議な勝利：夢による不安、「主のため、ギデオンのため」、同士討ち
- 3. 神様の人間の取り扱い

(1)高慢を打ち碎かれる

(2)弱さに寄り添ってくださる

むすび. 経験を通して謙遜にされ、主に栄光を帰す者に